

体育・スポーツにおける動機づけの横断的検討

—先行研究の概観から—

藤田 勉〔鹿児島大学教育学部（保健体育）〕

Cross-Sectional Study of Motivation in Sport and Physical Education

FUJITA Tsutomu

キーワード：体育授業，運動部活動，自己決定理論，達成目標理論，運動意欲

1. はじめに

学習指導要領（文部科学省，2008）には，体育授業において生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うこと，また，運動部活動においても，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意することが明記されている。運動部活動では，競技選手になることを目指す生徒や学生がいる。しかしながら，運動部活動の参加率は，中学生よりも高校生の方が低く，大学生ではさらに低くなっている（伊藤ほか，2006）ことを考慮すれば，競技からの離脱後あるいは引退後の生涯スポーツへの移行も視野に入れておく必要がある。したがって，体育授業と同様に運動部活動においても，生涯にわたって運動を継続する基盤が現役時代に形成されていることが望ましい。では，生涯にわたり運動を継続する要因とは何か，また，それは発達に伴ってどのように変化していくのであろうか。

体育・スポーツ心理学において，運動の継続を規定する要因として動機づけがある。動機づけとは，人間に行動を起こさせ，その行動を維持してある一定の方向に向かわせる心的な過程（杉原，2003）であり，興味，関心，意欲，やる気などを包括する構成概念である。わが国では，体育授業における動機づけの横断的データを提示した研究がある。西田（1995）は期待・感情の観点から体育における学習意欲について，岡沢ほか（1996）は運動有能感について，発達段階別のデータを提示し，比較検討を行ったところ，両者とも発達に伴って動機づけが低下していくことを示した。本稿では，体育授業及び運動部活動において動機づけの自己決定理論（Deci & Ryan，1985，1991，2000）と達成目標理論（Elliot &

McGregor，2001；Nicholls，1989）に基づく尺度を使用したわが国の先行研究から，小学生，中学生，高校生，大学・高等専門学校生のデータを横断的に検討することを試みる。多様な理論的枠組みからデータが提示されること，また，体育授業のみならず，運動部活動のデータも提示することは，わが国の体育・スポーツにおける動機づけの発達に関する情報として有益であると考えられる。

自己決定理論と達成目標理論は，1990年代から体育・スポーツ心理学における動機づけ研究の中核的な枠組みとなっている。自己決定理論研究については体育・スポーツ領域のみの知見が集約された著書（Hagger & Chatzisarantis，2007）が出版され，達成目標理論研究については主要な雑誌で掲載された論文だけでもその数は200を超えられている（Conroy & Roberts，2007）。自己決定理論では有能さへの欲求の充足の程度が動機づけに影響すること，達成目標理論では有能さの捉え方の違いが動機づけに影響することが仮説に挙げられており，動機づけプロセスにおける有能さの位置づけは異なるものの，有能さを重要な要因として考えている点では共通している。また，両理論は動機づけが生まれ持った個人の特性で決まるというよりは，社会環境からの影響を受けるという立場である。自己決定理論を提唱したDeciも達成目標理論を提唱したNichollsも1960年代から1970年代にかけてのアメリカの競争社会の中で子どもたちの意欲が低下していくという現状の改善を試みようとする理論を発展させてきたことから，指導者（教師，コーチ）や仲間（クラスメイト，チームメイト）といった重要な他者の役割を重視している。

2. 自己決定理論

自己決定理論では、有能さ、自律性、関係性を求めることを前提とし、有能さへの欲求、自律性への欲求、関係性への欲求という3つの基本的心理的欲求の充足の程度が動機づけに影響することを仮説としている。Deci (1971) により、外的報酬が内発的動機づけを低下させることが示され、その後、認知的評価理論 (Deci & Ryan, 1985) が提唱されたことから、自己決定理論は、当初、内発的動機づけの研究が中心であった。しかしながら、行動すること自体を目的とする内発的動機づけに対して、行動することが報酬獲得の手段となる外発的動機づけを対立的に捉えるのではなく、外発的動機づけを自律と他律という視点から概念化した有機的統合理論 (Deci & Ryan, 1985) が提唱され、自律性の程度が高い外発的動機づけは肯定的な結果を導くと考えられ、見直されるようになった。さらに、内発でも外発でもない動機づけである非動機づけが加えられ、現在の自己決定理論は、全ての種類の動機づけを包括する枠組みとなっている。以下、各動機づけについて、体育授業やスポーツ活動の場面に例えた概念的特徴を示す。

非動機づけは、最も自律性の程度が低いあるいは自律という概念に対応していない動機づけとして位置づけられているため、動機づけられていない状態として考えられることもあるが、運動をしていないあるいは参加していないという意味ではない。Deci & Ryan (1991) は非動機づけに類似した概念として学習性無力感を挙げていることから、運動に取り組みながらも、有能さや価値が欠損している状態であり、運動を上達させていくことに諦めを感じているあるいは運動をすることに何の興味や価値も感じていないという動機づけになると考えられる。

外発的動機づけについては、自律性の程度により、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、統合的調整の4つに区分されている。外的調整は、外発的動機づけの中でも自律性の程度が低く、他者から強制させられている感覚を経験しながら、運動に取り組んでいる動機づけである。取り入れ的調整は、外的調整よりも自律的であるが、自律

しているレベルではなく、自尊心を維持するため、恥をかくことを避けるため、他者からの承認を得るために運動に取り組んでいる動機づけである。同一化的調整および統合的調整は、運動をすることが報酬獲得のための手段とする外発的動機づけでありながらも自律性の程度が高く、健康の維持増進のため、友人関係を築くために運動に取り組む自律的な外発的動機づけであると考えられる。

内発的動機づけは、運動をすること自体が目的となり、その目的とは、成就、刺激体験、知識 (Vallerand, 1997) である。例えば、運動を上達させること、運動をすることで爽快感を得ること、運動をする中で新しい発見をすることが相当する。

これらの概念的特徴に対応した尺度開発の研究は、1990年代に行われ、体育授業用 (Goudas et al., 1994)、スポーツ用 (Pelletier et al., 1995)、健康運動用 (Mullan et al., 1997) の動機づけ尺度が開発された。また、多様な発達段階、多様な文脈 (競技スポーツ、体育授業、健康運動) で調査研究が行われ、発達段階や文脈によって研究の結果は若干異なる部分があるものの、自己決定理論の仮説はいずれの研究でもほぼ支持されている (レビューとして、Vallerand, 2007 a, 2007b)。わが国においても、小学生から大学・高等専門学校生の体育授業や運動部活動のデータがある。

藤田・佐藤 (2010) は、体育授業用の5因子構造からなる動機づけ尺度を作成し、小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較検討を行った。その結果、小学生の方が中学生よりも自律的動機づけ (内発的動機づけ、同一化的調整) の得点が高かった。また、多母集団の同時分析により、配置不変が確認され、小学生の方が中学生よりも自律的動機づけと非動機づけの負の相関関係が強いことが示された。これは、小学生と中学生の動機づけの構造自体は変わらないが、小学生は中学生よりも、自律的動機づけが高い (低い) と非動機づけが低い (高い) という関係が強いことを示している。藤田ほか (2010) では、大学体育実技用の動機づけ尺度の検討が行われたが、自律的な外発的動機づけである統合的調整と同一化的調整が識別され、小中学生用の尺度とは異なる6因

子構造の尺度が作成された。これは、欧米の研究においても見られることであり、発達段階によって動機づけの因子構造が異なることを示唆している。

では、多様な種類の動機づけが区分されることでどういう研究結果がもたらされているのであろうか。藤田ほか（2008）は、中学生を対象として各動機づけから運動参加意図への影響を検討したところ、運動参加意図に対して、内発的動機づけと同一化的調整から正の影響、非動機づけから負の影響が示された。しかしながら、藤田（2009 a, 2009 b, 2009 c）や藤田（2010 a）の研究では、結果要因に対して正の影響が示されたのは内発的動機づけのみであり、非動機づけからは負の影響が示された。同一化的調整から結果要因への影響については一致した見解は得られていないものの、内発的動機づけと同一化的調整の相関が高いことからすれば、同一化的調整は外発的動機づけであっても、非動機づけのような結果要因へ負の影響を示す動機づけではないと考えられる。

さらに、動機づけに影響する社会的要因の検討についても研究が展開されている。藤田（2009 a）は中学生を対象として自律性支援の認知と動機づけの関係の性差を検討し、女子の方が男子よりも教師からの自律性支援の認知とクラスメイトからの自律性支援の認知の相関が弱いことを示した。これは、女子の方が男子よりも教師からの自律性支援とクラスメイトからの自律性支援を区別して認知していることを示している。すなわち、女子は男子よりも体育授業で受ける自律性支援の質を教師とクラスメイトでは異なるものとして考えていることを示唆している。また、藤田（2010 a）は、Vallerand（1997）の動機づけ因果連鎖の仮説を検討し、教師及びクラスメイトからの自律性支援の認知は心理的欲求を媒介して動機づけに影響することを明らかにしたが、心理的欲求のうち、自律性への欲求、有能さへの欲求、関係性への欲求（対クラスメイト）は自律性支援の認知と動機づけを媒介したが、関係性への欲求（対教師）はどの動機づけにも影響しなかった。これは、教師からの自律性支援は、教師に親しみを感じている程度ではなく、教師から自律性や有能さを感じ

る情報が得られている程度を媒介して動機づけに影響すること、クラスメイトからの自律性支援は、クラスメイトと親しい関係が保たれている程度を媒介して動機づけに影響することを示唆しており、動機づけにおける教師からの影響とクラスメイトからの影響のプロセスが異なることを示している。

そして、体育授業のみならず、運動部活動においても、藤田・杉原（2007 a）や藤田（2008）によって研究が展開されている。藤田・杉原（2007 a）は、2000年以降、内発的・外発的動機づけ階層モデル（Vallerand, 1997）における動機づけ因果連鎖の検討が構造方程式モデリングにより分析されるようになったことについて、どの心理的欲求がどの動機づけにどのように影響するのかが明らかにされておらず、多様な動機づけ概念が1つのモデルに組み込まれたメリットが生かされていないことを批判した。そこで、大学生と高等専門学校生を対象として、スポーツからの離脱の動機づけメカニズムを明らかにするために各心理的欲求と各動機づけの関係を詳細に検討した。その結果、自律性への欲求は内発的動機づけと非動機づけを媒介として、有能さへの欲求は内発的動機づけを媒介として、離脱意図に影響することを明らかにした。また、藤田（2008）も同様のアプローチで運動部活動に参加する中学生と高校生を対象とした研究を行ったところ、自律性への欲求と関係性への欲求（対チームメイト）が内発的動機づけと非動機づけを媒介して離脱意図に影響することが明らかになった。これらのことは、各心理的欲求と各動機づけを詳細に検討したことから示された結果であると共に、発達段階が異なれば、各心理的欲求から各動機づけへの影響が異なることを示唆していると考えられる。

3. 達成目標理論

達成目標理論（Nicholls, 1989）では、有能さの獲得を目標として、課題関与と自我関与という2つの達成目標を仮定している。課題関与になるか自我関与になるかは能力概念が分化しているか否か（努力と能力を区別して考えるか否か）によって決定される。未分化概念が採用されれば、有能

さの解釈は自己基準的になり、分化概念が採用されれば、有能さの解釈は他者基準的になる。例えば、課題関与で運動に取り組む人は個人レベルでの上達や多くの努力を費やすことに有能さを感じるのに対して、自我関与で運動に取り組む人は他者比較での優越や同じ成功なら他者よりも少ない努力による成功に有能さを感じるのである。

これら2つの達成目標の概念に基づき、体育・スポーツ心理学では、個人がどちらの達成目標を志向するかを測定する目標志向性尺度 (Duda, 1989; Roberts et al., 1998) と環境がどちらの達成目標を重視するかを測定する動機づけ雰囲気尺度 (Seifriz et al., 1992; Newton et al., 2000) が開発され、研究が盛んに展開されるようになった。また、達成目標には様々な名称が付けられているが、Duda & Whitehead (1998) は、呼び名の誤解を避けるため、個人の傾向である目標志向性を課題志向性及び自我志向性と呼び、環境の認知である動機づけ雰囲気を課題関与的雰囲気及び自我関与的雰囲気と呼ぶことを推奨している。これらの達成目標に加え、近年では、新たな個人傾向の達成目標として、熟達目標 (課題志向性と類似) と成績目標 (自我志向性と類似) のそれぞれに接近と回避という次元が加えられた達成動機づけの階層モデル (Elliot & McGregor, 2001) の研究も展開されている。

わが国の体育・スポーツ心理においても達成目標理論研究は増えつつある。伊藤 (1996) は運動部活動参加者を対象としてスポーツにおける目標志向性と動機づけ関連要因の関係を検討し、熟達目標 (課題志向性) の方が成績目標 (自我志向性) よりも適応的であることを明らかにした。細田・杉原 (1999) は中学生を対象として体育授業における目標志向性が内発的動機づけに及ぼす影響に有能感を加味した分析を行ったところ、目標志向性よりも有能感の高低が内発的動機づけに影響するが、自我志向性が高く有能感が低い生徒は特に内発的動機づけが低くなることを示した。藤田・末吉 (2010) は、大学生を対象としてシャトルランにおける目標志向性と自己効力感の影響を検討したところ、シャトルランの成績は目標志向性の種類に関係なく、自己効力感の影響を受けるが、

努力意図については課題志向群 (課題志向性が高い者) の方が自我志向群 (自我志向性が高い者) よりも高く、また、諦め意図については自我志向群の方が課題志向群よりも高いことを明らかにした。さらに、近年では、達成動機づけの階層モデルを応用し、達成目標と、動機づけ (藤田, 2009 b), 社会的スキル (藤田, 2010 b), 援助要請 (藤田, 2010 c) の関係を検討した研究も展開されている。

4. 統合的アプローチ

達成目標理論が提唱された当初は、能力の認知 (自信, 自己効力感, 有能感など) の高低に関わらず、努力すること、個人レベルの上達を目指すことを重視する課題関与 (課題志向性及び課題関与的雰囲気) の方が他者との比較次第で良くも悪くもなる自我関与 (自我志向性及び自我関与的雰囲気) よりも動機づけ関連要因に対して適応的であるとの見解が多く、実証もされてきたが、自我関与が不適応的であると結論付けるまでには至らず、一致した研究結果が得られなかった。その問題の解決策として提唱されたのが、達成動機づけの階層モデルであり、近年の達成目標理論研究の主流になりつつあるアプローチである。

それとは別に、体育・スポーツ心理学では、能力の認知を社会環境と動機づけの媒介変数とするモデルも検討された。このモデルは、自己決定理論に基づく動機づけプロセスを応用したものである。体育・スポーツ心理学では、Duda (1989) の目標志向性尺度やSeifriz et al. (1992) の動機づけ雰囲気尺度の開発が先になされたことから、達成目標理論研究の方が自己決定理論研究よりも調査研究の展開が早くから進められてきた。自己決定理論に基づく尺度でも、内発的動機づけを測定する指標として、IMI (Intrinsic Motivation Inventory, Ryan, 1982) をスポーツ用に改良した尺度 (McAuley et al., 1989) はあったが、Duda & Hall (2001) は目標志向性尺度あるいは動機づけ雰囲気尺度と、スポーツ用のIMIを使用した研究結果の非一貫性を批判し、動機づけを多面的に捉えることが重要であることを指摘した。

Pelletier et al. (1995) により開発されたSMS

(Sports Motivation Scale, Pelletier et al., 1995) は、自己決定理論に基づく多面的な動機づけ尺度である。この尺度では、内発的動機づけ、外発的動機づけ、非動機づけの全ての動機づけを測定することができるため、1990年代中頃以降の体育・スポーツ動機づけ研究を代表する動機づけ尺度となった。この尺度開発に加えて、Vallerand (1997) が提唱した内発的・外発的動機づけ階層モデルには、認知的評価理論に基づく因果連鎖の仮説が挙げられており、この仮説をめぐって多くの研究者が構造方程式モデリングを屈指した分析を行うようになり、これまで単一的な相関関係あるいは影響関係しか示せなかった分析から、多面的あるいは階層的に構成される動機づけを一度に分析できるようになった。

藤田・杉原 (2007b) は、大学生を対象として高校時代の体育授業における内発的動機づけと大学入学後の運動参加の関係を検討するため、自己決定理論と達成目標理論を統合的に捉えたモデルを検討した。これは、達成目標理論において動機づけプロセスにおける能力の認知の位置づけに一貫性がないことから、自己決定理論に基づく社会環境を心理的欲求が媒介するという動機づけプロセスを応用し、また、自己決定理論では動機づけに影響する社会環境が理論的枠組みから構造化されていないことから、達成目標理論に基づく動機づけ雰囲気为社会環境へ組み込んだ統合的なモデルを検討するというものであった。構造方程式モデリングの結果からは、大学生の運動参加は高校時代の体育授業における内発的動機づけの影響を受けていること、その内発的動機づけは心理的欲求を媒介変数とした動機づけ雰囲気の影響を受けていることが示された。さらに、藤田ほか (2009) は、中学生を対象として体育授業における心理的欲求に影響する教師及びクラスメイトの行動を動機づけ雰囲気観点から検討した。その結果、教師による動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響について、課題関与的雰囲気(協力・熟達/努力、重要な役割)から正の影響、自我関与的雰囲気から負の影響が示され、クラスメイトによる動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響について、課題関与的雰囲気から正の影響が示された。また、藤

田・松永 (2009) は中学生と高校生の運動部活動参加者を対象として運動部活動における心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動を動機づけ雰囲気観点から検討した。その結果、コーチによる動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響について、課題関与的雰囲気から正の影響、自我関与的雰囲気から負の影響が示され、チームメイトによる動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響について、課題関与的雰囲気から正の影響、自我関与的雰囲気から負の影響が示された。

5. 横断的データの検討

わが国においても、自己決定理論及び達成目標理論に基づく研究は増えてきているが、両理論の枠組みから発達に関するデータは提示されていない。先行研究の概観からすれば、体育授業と運動部活動のデータ、また、各発達段階のデータを同じように解釈できないため、横断的データを検討する意義はあると考える。そこで、本研究では、先行研究(藤田, 2008, 2009a, 2009b, 2009c, 2010d; 藤田・松永, 2009; 藤田・佐藤, 2010; 藤田・杉原, 2007a; 藤田・森口・松永, 2009)で使用されたデータを整理し、再分析することにより横断的データを提示する。各尺度の説明については各先行研究を参考にしてほしい。

図1から図4は、小学5年生から中学3年生までの体育授業のデータをグラフ化したものである。図1と図3は小学生と中学生に分けたデータ、図2と図4は小学校5年生あるいは6年生から中学校3年生までのデータである。使用した尺度は自己決定理論に基づく動機づけ尺度と達成目標理論に基づく目標志向性尺度及び接近回避傾向が含まれる達成目標尺度である。小学生と中学生に分けて各尺度得点をt検定(有意水準1%)により比較した場合、熟達回避目標、成績接近目標、失敗恐怖、非動機づけ、自我志向性については、中学生の方が小学生よりも有意に高い得点を示した(図1)。また、データを学年別にして一要因分散分析(有意水準5%)並びに多重比較(有意水準5%)を行った場合、全ての尺度において同じ発達段階(同じ校種の学年間)では有意な差はなく小学校のいずれかあるいは両方の学年と中学校全

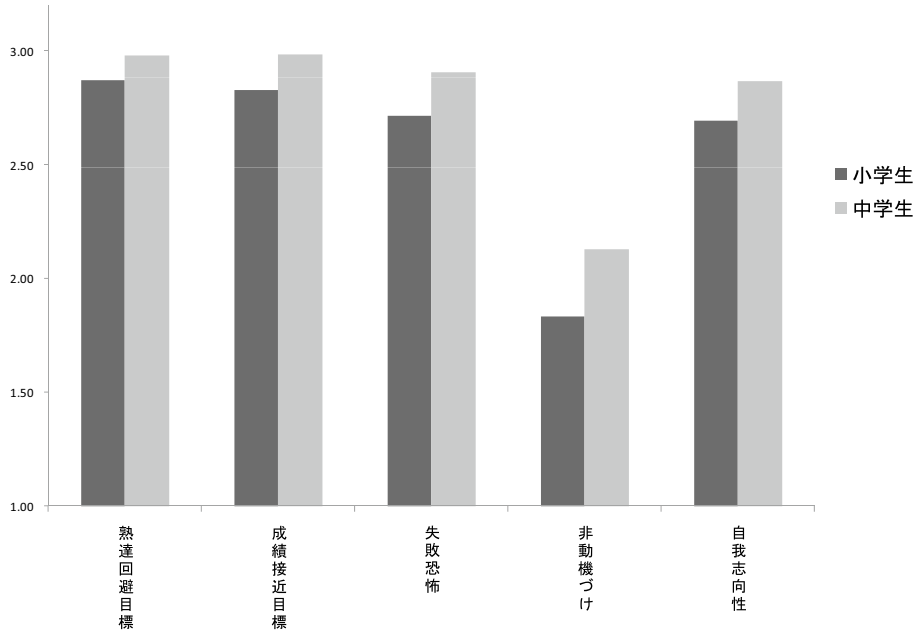


図1. 中学生の方が小学生よりも有意に高かった尺度

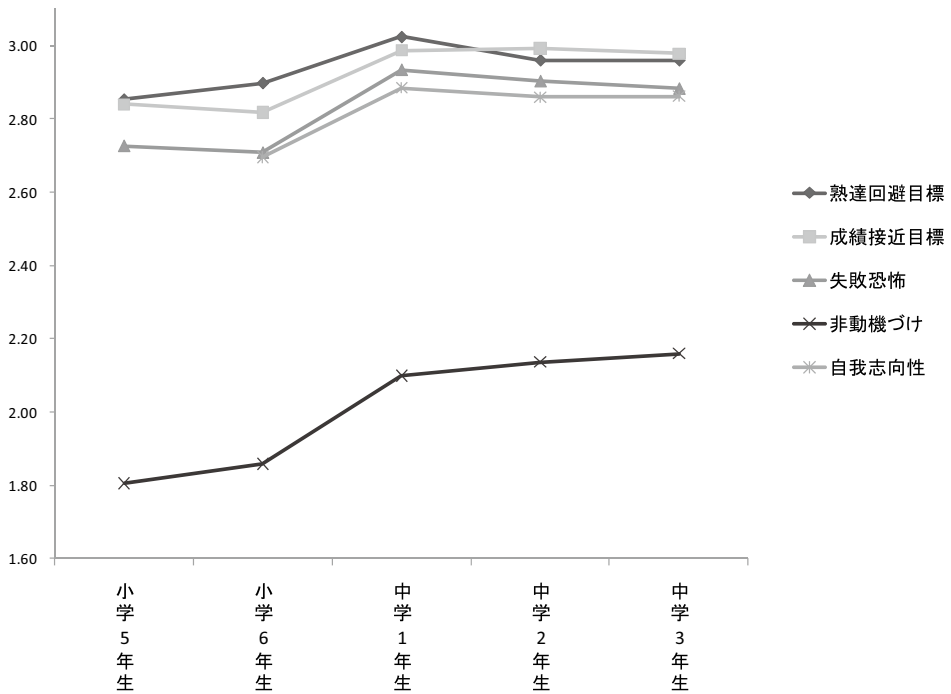


図2. 小学5年生から中学3年生までの横断的データ(1)

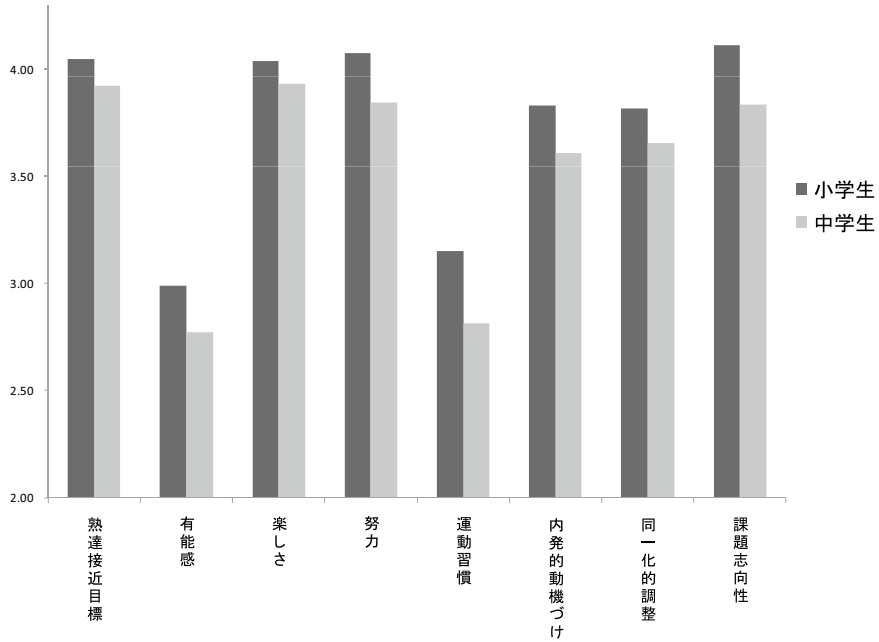


図3. 小学生の方が中学生よりも有意に高かった尺度

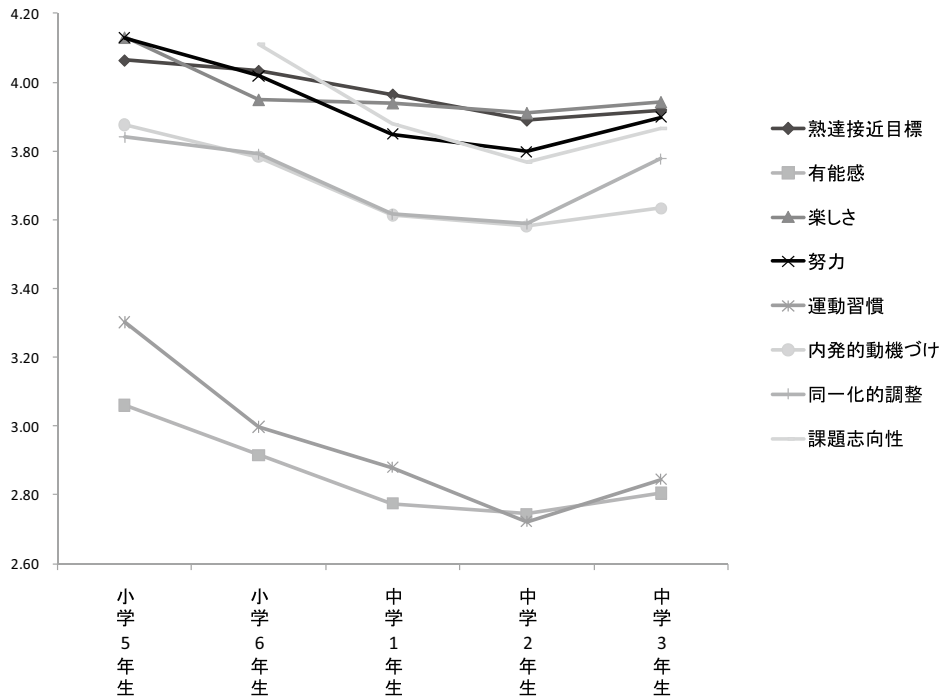


図4. 小学5年生から中学3年生までの横断的データ(2)

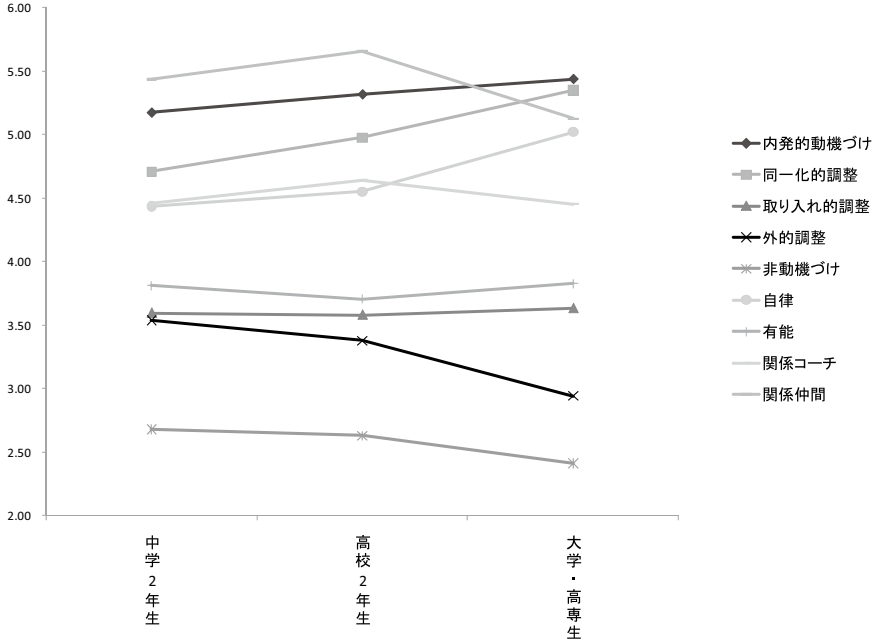


図5. 心理的欲求と動機づけの横断的データ

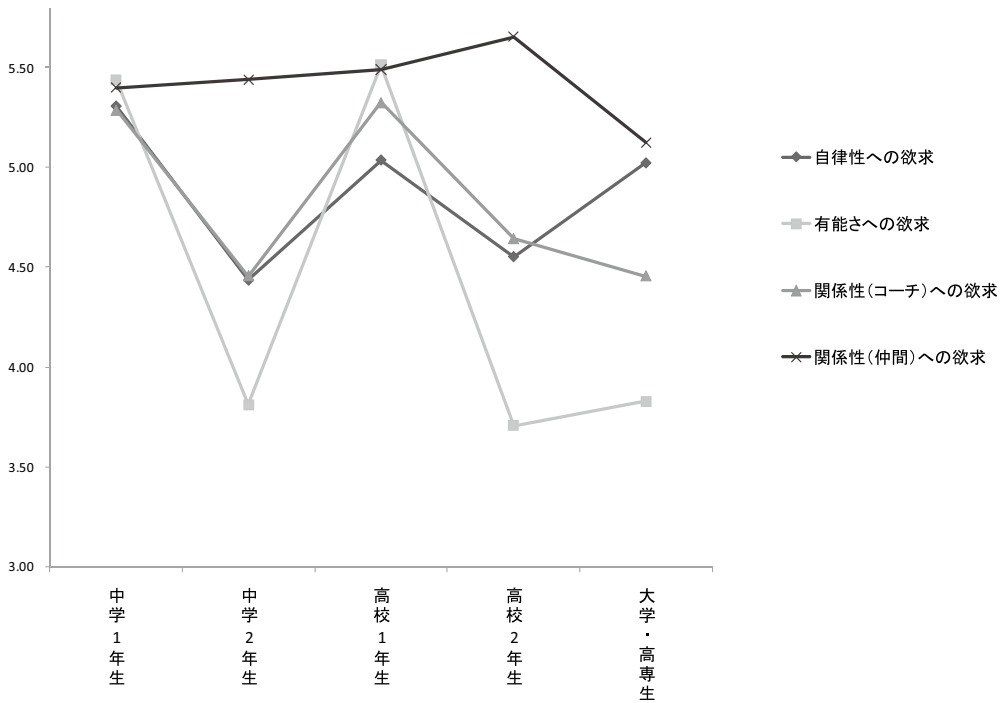


図6. 心理的欲求の横断的データ

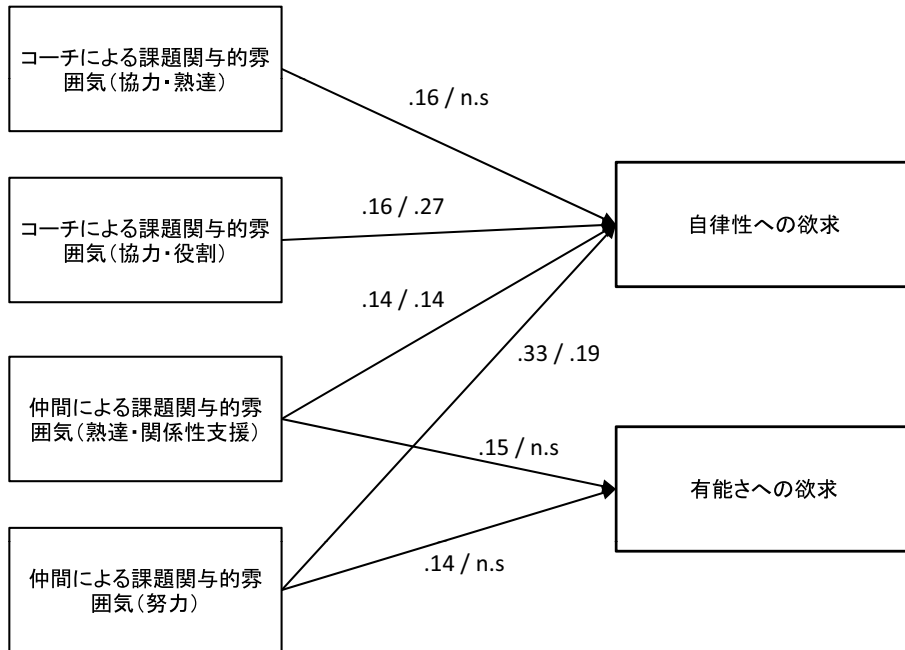


図7. 動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響 (中学生/高校生)

学年に有意な差が示された(図2)。先行研究を参考にすると、これらの尺度は動機づけの不適應的な側面に相当する構成概念である。すなわち、運動の継続に望ましくない要因は発達段階の移行に伴って高くなると考えられる。

一方、熟達接近目標、有能感、楽しさ、努力、運動習慣、内発的動機づけ、同一化的調整、課題志向性については、t検定(有意水準1%)の結果、小学生の方が中学生よりも有意に高い得点を示した(図3)。しかしながら、データを学年別にして一要因分散分析(有意水準5%)並びに多重比較(有意水準5%)を行った場合、同じ発達段階では有意な差はなく小学校のいずれかあるいは両方の学年と中学校全学年に有意な差が示される尺度(熟達接近目標、熟達回避目標、失敗回避、楽しさ、努力、有能感)と、中学3年生が小学生とは有意な差がなく中学1年生と中学2年生よりも有意に高い尺度(同一化的調整)があった(図4)。先行研究を参考にすると、これらの尺度は動機づけの適應的な側面に相当する構成概念であ

るが、必ずしも運動の継続に望ましい要因の全てが発達段階の移行に伴って低下するわけではないと考えられる。

図5と図6は、中学生から大学・高等専門学校生までの運動部活動のデータをグラフ化したものである。図5は、中学2年生、高校2年生、そして、大学・高等専門学校生のデータを提示したものであり、図6は、中学校から2学年(1年生と2年生)、高等学校から2学年(1年生と2年生)、大学・高等専門学校生のデータを提示したものである。使用した各尺度は自己決定理論に基づく心理的欲求尺度と動機づけ尺度である。2つの図を比べると、中学校から高等学校、あるいは高等学校から大学・高等専門学校という発達のな変化のみならず、学年間の変化にも注目すべきである。例えば、図5に示されている心理的欲求のデータについて、中学校2年生、高校2年生、大学・高等専門学校で一要因分散分析を行ったところ、有能への欲求は発達段階で有意な差はなく、関係性への欲求は対コーチ及び対仲間の両方とも高校2年生の

方が中学2年生及び大学生よりも有意 ($p < .01$) に高く、自律性への欲求は、高校2年生の方が中学2年生よりも、また、大学・高等専門学校生の方が高校2年生よりも有意 ($p < .01$) に高くなっている。

しかしながら、中学校から2学年(1年生と2年生)、高校から2学年(1年生と2年生)、大学・高等専門学校生で一要因分散分析を行ったところ(図6)、関係性への欲求(対仲間)を除く他の尺度は、中学1年生から中学生2年生にかけて有意 ($p < .01$) に低下し、高校1年生では中学1年生時のレベルまで高くなるが、高校2年生で再び有意 ($p < .01$) に低下している。そして、大学・高等専門学校生では中学生や高校生のときのような一貫した得点分布にはなっていない(大学・高等専門学校生の場合は学年や年齢を区別していないため、このような結果になったかもしれない)。動機づけ尺度に関しては細かいデータを所有していないため、学年間の違いを示すことはできなかったが、藤田・杉原(2007a)は心理的欲求と動機づけに影響関係があることを明らかにしている。このことからすれば、動機づけも心理的欲求と同様に学年間の違いが見られるのではないかとと思われる。

これらのことについて、中学校で運動部活動に加入していた者が、高等学校進学後は加入しないなど、進学と共に運動部活動へ加入しなくなる者がいるためではないかと思われる。すなわち、中学1年生から中学2年生にかけて低下する心理的欲求は高校1年生で向上するのではなく、心理的欲求の充足の程度が低い生徒が運動部活動を辞めた分、高校1年生の心理的欲求は中学1年生と同レベルの値になるのではないかとと思われる。

そして、図7は、運動部活動における動機づけ雰囲気から心理的欲求への影響について、中学1年生(斜線左側)と高校1年生(斜線右側)のパスモデルを示したものである。自律性への欲求に対して、中学生では、課題関与的雰囲気の中の協力・熟達と協力・役割から、仲間による課題関与的雰囲気の中の熟達・関係性支援と努力から、正の影響が示されたが、高校生では協力・熟達からの影響が有意ではなかった。また、有能さへの欲

求に対して、中学生では仲間による課題関与的雰囲気の中の熟達・関係性支援と努力から正の影響が示されたが、高校生では有意な影響を示す要因はなかった。中学1年生と高校1年生の心理的欲求の尺度得点は同レベルであったが、心理的欲求に影響する動機づけ雰囲気は異なっており、中学校と高等学校では、動機づけに影響する社会環境の質は異なることが推察される。

6. まとめ

本稿では、自己決定理論及び達成目標理論に基づく先行研究のデータを使用して、体育授業及び運動部活動の横断的データを検討した。体育授業のデータについて、動機づけの不適應的な側面は中学生の方が小学生よりも高いことが示されたが、動機づけの適應的な側面については小学生の方が中学生よりも高いことが示される尺度と中学校3年生のみが小学生と同レベルの値を示す尺度があった。また、運動部活動では、中学校、高等学校、大学・高等専門学校の違いが示されたが、中学校及び高校それぞれにおいて学年間の違いも示された。体育授業及び運動部活動の両方において、発達段階(校種間)の違いのみならず、学年間の違いも示されたことからすると、横断的データの検討には、発達段階と各学年のデータの両方を提示することがより有益であると考えられる。学習指導要領においては各校種のみならず、各学年に目標が設定されている。また、運動部活動における離脱の原因は校種間というよりもその校種内にあると推察される。したがって、体育授業や運動部活動において、児童生徒の動機づけにおける適應的な側面を高め、不適應的な側面を低下させるには、発達段階のみならず、各学年に応じた動機づけ方略を検討していくことが生涯にわたり運動を継続する動機づけを育むことに有用であると考えられる。

文献

- Chatzisarantis, N. L. D., & Hagger, M. S. (2007). Intrinsic motivation and self-determination in exercise and sport (pp. 281-296). Champaign, IL: Human Kinetics.

- Conroy, D. E. & Roberts (2007). Understanding the dynamics of motivation in sport and physical activity: An achievement goal interpretation. In G. Tenenbaum & R. C. Eklund (Eds.), *Handbook of research of sport psychology* (3d ed., pp. 3-30). New York: Wiley.
- Deci, E. L. (1971). Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 105-115.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1991). A motivational approach to self: Integration in personality. In R. A. Dienstbier (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation* (Vol.38, pp.237-288). Lincoln: University of Nebraska.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The 'what' and 'why' of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.
- Duda, J. L. (1989). Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 3, 318-335.
- Duda, J. L., & Hall, H. K. (2001). Achievement goal in sport: Recent extensions and future directions. In R. N. Singer, H. A. Hausenblas, & C. M. Janelle (Eds.), *Handbook of research of sport psychology* (2nd ed., pp. 417-434). New York: Wiley.
- Duda, J. L. & Whitehead, J. (1998). Measurement of goal perspectives in the physical domain. In J. L. Duda (Ed.), *Advances in sport and exercise psychology measurement* (pp. 21-48). Morgantown, WV: Fitness Information Technology.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.
- 藤田勉 (2008). スポーツ文脈における動機づけの自己決定理論と達成目標理論からの検討. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士論文.
- 藤田勉 (2009 a). 体育授業における教師及びクラスメイトからの自律性支援の認知と動機づけの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 41-50.
- 藤田勉 (2009 b). 体育授業における達成目標の接近回避傾向と動機づけの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 61-70.
- 藤田勉 (2009 c). 体育授業における目標志向性, 動機づけ, 楽しさの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 51-60.
- 藤田勉 (2010 a). 体育授業における動機づけ因果連鎖の検討. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 61, 47-73.
- 藤田勉 (2010 b). 体育授業における達成目標の接近回避傾向と社会的スキル及び適応感の関係. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 61, 75-81.
- 藤田勉 (2010 c). 体育授業における達成目標と援助要請の関係. 研究論文集-教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集, 3(2), 1-17.
- 藤田勉 (2010 d). 体育授業における達成目標と動機づけの関係-2目標視点と4目標視点の比較検討-. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 61, 83-92.
- 藤田勉・松永郁男 (2009). 運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及び仲間の行動. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 71-80.
- 藤田勉・佐藤善人 (2010). 小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較検討. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 61, 43-59.
- 藤田勉・末吉靖宏 (2010). シャトルランにおける目標志向性と自己効力感の影響. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 61, 93-102.
- 藤田勉・杉原隆 (2007 a). スポーツ文脈における心理的欲求と動機づけの関係. 学校教育学研

- 究論集, 16, 81-94.
- 藤田勉・杉原隆 (2007b). 大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ. 体育学研究, 52, 19-28.
- 藤田勉・森口哲史・松永郁男 (2009). 運動部活動からの離脱意図に影響する動機づけプロセスの検討. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 60, 289-297.
- 藤田勉・佐藤善人・森口哲史 (2010). 自己決定理論に基づく運動に対する動機づけの検討. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 61, 61-71.
- 藤田勉・森口哲史・徳田清信・溝田さと子・山下健治・浜田幸史 (2008). 運動参加意図を予測する中学校体育における動機づけモデルの検討. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 18, 21-31.
- 藤田勉・森口哲史・徳田清信・溝田さと子・山下健治・浜田幸史・松永郁男 (2009). 体育授業における心理的欲求に影響する教師及びクラスメイトの行動. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 60, 69-80.
- Goudas, M., Biddle, S., & Fox, K. R. (1994). Perceived locus of causality, goal orientations, and perceived competence in school physical education classes. *British Journal of Educational Psychology*, 64, 453-463.
- 細田朋美・杉原隆 (1999). 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響. 体育学研究, 44, 90-99.
- 伊藤豊彦 (1996). スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. 体育学研究, 41, 261-272.
- 伊藤静夫・谷口勇一・森丘保典 (2006). スポーツ競技団体の登録人口動態. 体育の科学, 56, 372-377.
- McAuley, E., Duncan, T., & Tammen, V.V. (1989). Psychometric properties of the intrinsic motivation inventory in a competitive sport setting: A confirmatory factor analysis. *Research Quarterly of Exercise and Sport*, 60, 48-58.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東京東: 洋館出版社.
- Mullan, E., Markland, D., & Ingledew, D. K. (1997). A graded conceptualization of self-determination in the regulation of exercise behavior, Development of a measure using confirmatory factor analytic procedures. *Personality and Individual Differences*, 23, 745-752.
- Newton, M., Duda, J. L., & Yin, Z. (2000). Examination of the psychometric properties of the Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2 in a sample of female athletes. *Journal of Sports Sciences*, 18, 275-290.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 西田保 (1995). 運動への動機づけ 速水敏彦・橘良治・西田保・宇田光・丹羽洋子著 動機づけの発達心理学 (pp.100-107). 東京: 有斐閣.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996). 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. *スポーツ教育学研究*, 16, 145-155.
- Pelletier, L. G., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K.M., Briere, N.M., & Blais, M.R. (1995). Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports, The Sport Motivation Scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 35-53.
- Roberts, G. C., Treasure, D. C., & Balague, G. (1998). Achievement goals in sport: Development and validation of the perception of success questionnaire. *Journal of Sport Sciences*, 16, 337-347.
- Seifriz, J. J., Duda, J. L. & Chi, L. (1992). The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14, 375-391.
- 杉原隆 (2003). 運動指導の心理学. 東京: 大修館書店.

- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 271-360). New York: Academic Press.
- Vallerand, R. J. (2007a). A Hierarchical Model of Intrinsic and Extrinsic Motivation for sport and physical activity. In M. SD. Hagger & N. L. D. Chatzisarantis (Eds.), *Self-determination theory in exercise and sport* (pp. 255-279). Champaign, IL : Human Kinetics.
- Vallerand, R. J. (2007b). Intrinsic and extrinsic motivation in sport and physical activity: A review and a look at the future. In G. Tenenbaum & E. Eklund (Eds.), *Handbook of sport psychology* (3rd ed., pp. 49-83). New York: John Wiley.